

「福祉」と「労働」へのアプローチ

若い方はご存知ないかもしれませんが、1980年くらいを境にして、いろいろなことが様変わりしてきました。その200年前の1789年にはフランス革命が起きました。ずっと続いてきたものの考え方や制度が変わるといふ大きな変化がありました。この二百年のものの考え方が今では通用しなくなってきました。そこで、現在のいろいろな事象を捉えようとしたとき、元々どのような歴史をもって出てきた言葉や概念なのか、ということをおぼろげにわかんないわけです。

今回いただいたテーマの「介護労働」を「福祉労働」と言い換えてみると、「福祉」と「労働」は、200～300年前にイギリスで発祥した言葉です。それだけの歴史をもって現在にたどりついています。近代的な「労働」というコンセプトができてきて、初期の段階から「福祉」というコンセプトがいつしよになって、いわば世の中の秩序の中核をなしてきました。けれども、当時は今いわれているような「福祉労働」という概念がなかったわけですから、問題点が浮上してくることはなかったのです。

そこで、介護労働の現状がどのような問題をもっているのかを知ろうと思い、福祉労働の現場に関する雑誌の特集記事などを読みました。そこから二つの問題意識が出てきました。ひとつは、どんな労働現場に追いつめられているのかという現状分析です。もうひとつは、政策的な提言や見通しや改革を通して、どんな実践的な課題を見いだしていくか、ということです。こうしたことを中心にした勉強会は、あちこちで行われていると思いますし、この勉強会の課題でもあるだろうと思います。

しかし、そこにアプローチするもうひとつの方法として、「福祉労働」について「福祉」と「労働」という基礎的なところから追いかけて、現在にいたる意味の変遷をみていきたいのです。サービス労働の根源にある「感情労働」が極端なカタチで現れているのが介護やケアワークですし、それらを捉えていくことにも普遍性があると思います。しかし、もっと基本を押さえていくというアプローチがあるのではないのでしょうか。

労働に付与されてきた意味

「労働」という言葉が一般的に使われ始めたのは、アダム・スミスの『国富論』（1789年）からです。市場社会での労働が広まってきました。そこでは4つのことが挙げられます。

1：『国富論』の冒頭には「一国家の富の源泉が労働である」ということが書かれています。

こうした社会では市場で商品を交換することが中心課題になりました。はじめて労働に意味が与えられたのです。

2：近代的な労働は「協業」になっています。職人が何かを作り上げたり畑を耕して農産物を作るという限定された労働ではなく、組織された集団として物を作り出すという「協業労働」が行われました。

そのなかには、「説得性向」「交換性向」「分業」があります。市場で物を交換するときに身ぶりや言葉を使って相手を説得するのが「説得性向」です。そこから、自分の物を買ってもらい、相手の物を安く売ってもらい、という言葉を使ったり感情を交換することが出てきます。物・言葉・感情を交換することが「交換性向」です。

こうした基礎があって初めて「分業」の役割が出てきます。いわゆる資本主義的な生産や市場経済が成り立っているなかで生産労働が位置づけられてきたのです。分業は他者とのあいだに間接的ながら交換関係があることを前提にしています。最初から「協業労働」が行われてきたということです。

3：私有財産を獲得するための労働です。当時、私有財産は自分の財産として狭く捉えられてはいませんでした。『市民政府論』を書いたロックは、自由という近代的なコンセプトを確立した元祖にあたり、「私有財産の獲得と防衛の自由」を挙げています。私有財産とは自己を獲得するということをふくんだ広い概念ですので、アダム・スミスの述べてきた富の源泉としての協業労働とあまり違っていません。

4：市場社会には、商品の等価交換をするので、道徳が求められます。生産労働に関していえば、商品としての労働力を市場で交換するわけですから、道徳的な了解が社会にないといけません。これは、市場に登場する見知らぬ他人とのあいだで、物を交換し思想を交換するときのベースになります。道徳的な規範性は法律になっていますが、それ以前の相互了解がないと社会が成り立たないのです。これを「労働」に置き換えると「勤勉」と「節約」になります。

役割遂行としての労働

協業労働の中で自分がある役割を遂行することで、いっしょに働いている人たちは自分と同じあるいは異なる分業体制にあるので、他人との関係のなかに自分をみるという視点が労働には付着しています。

「私」や「自己」がそのまま存在するということは、抽象的な見方なのであり得ないことです。子どもが赤ん坊から成長する過程で「自己」はないので、父親や母親などの自分

と利害関係にある身近な他人とのあいだで自己を確認していく、という発達過程をたどります。さらにそれは家族・学校・職場に拡大されていきます。固有名詞をもった他人を鏡にして自分を見つけていきます。

前近代的な社会では固有名詞があつて顔の見える人との対面で労働が成立していました。固有名詞をもって場に応じた役割を演じるという「役割遂行」が始まります。そして、職場から市場社会の労働になると、はじめて会った人や会うこともないような抽象的な他人との関係のなかで自分が位置づけられていきます。これを「社会的な役割を遂行する自分」あるいは「社会的な対他存在としての私」といいます。

アダム・スミスの時代から社会的な対他存在のなかで同じ役割と自己認識をもつ人々は階級に分けられているわけです。世の中は単純ですから、地主と資本家と賃労働者の3つに分類され、それぞれに役割が与えられていました。それ以外で仕事にあぶれている人はレーバリングプア (laboring poor) と呼ばれていました。

アダム・スミスは労働を「生産的な労働」と「不生産的な労働」とに分け、地主・医者・先生・歌手・芸人などサービス労働をする人たちは、不生産的労働をしているので生産労働にそぐわないものとししました。それに対して、資本家と労働者は価値や富を生み出すので、生産的労働をしているとししました。

最近にいたるまで、労働においてはこうした生産的労働が、きわめて特権的な位置を占めてきました。労働は意味のあるものとして神聖化されてきました。どこかで生産労働の概念を広げていかないと、今のサービス労働・感情労働・ケア労働などをまともにはつかめないのではないかと思います。

個人は孤人に非ず

市場社会において、対他存在として社会的な役割を行使しているかに見えても、すべての人が自分が何者であるかに不安を抱き、自分探しをしています。

ひとつはライフスタイルが同じ人やフィーリングが合う人同士がグループ（仲間）を作るということです。そこにいる人が他人という鏡をのぞいたとき、鏡に映っているのは自分であるということです。他人のなかに自分を発見することが集団のなかでできないという基本的な制約問題が常についてまわるような集団形成がなされてしまっています。

もうひとつはセラピー文化です。さまざまなセラピーを通して自己を発見していくということです。労働を典型とするような対他存在としての自分の発見からいうと、きわめて独特な「私とは誰か？」ということを経験するようになり、セラピストの鏡のなかで見ようとするようになっていきます。

大庭健は『いま、働くということ』（ちくま新書）のなかで、社会的な対他存在が孤立した人としての「孤人」になっていると述べています。依然としてこの社会の基本的な活

動は労働によって成り立っているのです、この問題は簡単にいうべきではないと思います。労働における関係の良し悪しや好き嫌いは別として、そこにおける社会関係と社会的自己認識の問題を真剣に掘り下げて、再建したり再発見していく必要があります。労働の外に自分を発見していくという現在の流行を、より戻していく道を発見していかなければならないと思うのです。

市場社会において個人は孤人になって、名刺交換のなかに自分を見いだし、労働の意味を見いださなくなりました。これまで労働として対価が支払われてこなかった市場社会の外部にあるような労働、いいかえれば家事労働と環境や生命を保全する労働に新たな形態のを見いだししていくことによって、労働の意味を回復しなければならないと大庭健は勧めています。ですから、アダム・スミス以来の労働の原像を見直してみることに意義があります。

17世紀以降の労働観

今村仁司『近代の労働観』（岩波新書）があります。いくつか興味をもったところを抜き出してみます。

第一に、アダム・スミスから100年前の17世紀の労働観について述べます。ヨーロッパの大都市で初めて近代的な意味での労働者があふれかえったのが17世紀です。それ以前は、農村の共同体のなかで百姓をしていました。現代の労働の観念とは違い、身体を使って汗水を流すこともしますが、儀礼や祭祀が労働の意味になっていました。そういう労働の意味が見失われて、ある人が「鳥のように自由な労働者が生まれた」といいました。

日本でいえば、1950～60年代にたくさんの若い人たちが東京や大都市に出てきたころに似ています。どのように労働の意義が強調されたかということ、「勤勉」と「節約」を労働を通じて獲得させます。そうでないと訳の分からないルンペンプロレタリアートが都会にあふれるので、ほっておくと風紀や社会秩序が乱れ、悪くすれば暴動が起きるという深刻な都市問題が生まれます。

それを社会秩序としてまとめていくときに、道徳的な観念として労働が強調されました。制度的な観点としては貧民救済です。貧民を救済する救貧院と呼ばれるところで、定期的に労働者狩りをして収容して、強制的に働かせて道徳をうえつけようということが、パリなどでは行われていました。その実態についてもこの本では紹介されています。18世紀になると、三大階級のなかに統合される労働者層が富を生み出す源泉として、救貧院のなかで教育されることなしに成立していき、ここに組織労働者の萌芽が出てきました。

第二に、1920年代のドイツの労働者に対して「あなたは労働することの意義や意味をどこに感じますか？」という聞き取り調査をしたド・マンという人がいます。彼は労働組合から派遣されてきている労働者に質問して報告書を書きました。今村さんはそれらをつぶ

さに読んで、労働の意味についての回答例 78 人分を本に再録しました。そこには自分の労働についてどう思っているかが異口同音に書かれています。1920 年代は、ドイツにおける労働者の力が確立されて、いちばん力が強かった時代のひとつです。

マルクスとエンゲルスという、のちの共産主義の親玉みたいな人のイデオロギーの影響下で、労働者が労働組合として組織されたいちばんの成功例が、実はドイツだったわけです。そういうマルクスの考え方を引き継いで、ドイツに労働組合ができて、同時にドイツ社会民主党（SPD）とペアになって、強大な力が作り出されました。

ちなみに、ドイツだけでなくオランダやイタリアをふくめて、イギリスを除くと二大政党は社会民主党とキリスト教民主主義です。キリスト教民主主義と社会民主党が入れ替わり立ち替わり連立を組んで政権を握ってきました。ここに福祉国家が登場したのです。ヨーロッパでは社会民主主義の労働組合が 20 世紀のはじめに確立され、労働者の階級の利害を擁護するという巨大な成果をあげ、現在に至っています。

「虚栄心」としての労働の意味

報告書は労働組合の学校での調査によるものなので、社会民主主義の労働者だけが来ているのではないかと誤解されるかもしれませんが、ヨーロッパはキリスト教民主主義も組合をもっています。

この報告書のなかで、「労働することそのもの」に意義や喜びがある、あるいは苦しみや苦痛があると回答した人は 78 人中に一人もいません。同じ質問に対して出てきた回答は「自分の労働がどのように評価されたか」に喜びや苦しみがあるということです。

今おこなっている労働に喜びや意義が「ある」と答えるか「ない」と答えるかは、いずれにしても上司や仲間によって評価されたり評価されなかったりするのなかで認識されているということです。社会的対他存在として働くことを引き受けているということが典型的に出ているのは面白いと思います。

現在は 1920 年代とは比較にならないほど労働環境が変わっているかもしれません。労働に意義を求めないで食べるための手段だと割り切って答える人は増えているかもしれません。しかし、現在の労働に意義を認めるかどうかにかかわらず、社会の主要な活動を担っている労働に関する評価が、対他存在としての自分についての評価なのだといえそうです。

このようにド・マンの調査結果をみていくと、労働とは働くことを通じて自分を認めてもらいたいという対他承認欲望であり、労働の意味とは「虚栄心」であるということになります。つまり、労働について考えるときには労働の協業関係をさまざまな観点からみていかなければなりません。労働者本人の気持ちのあり方に即した見方のひとつとして、以上のようなことがいえます。

このように「虚栄心」と言い換えると、アダム・スミスがいう「道徳感情論」につながります。そのキーになっているのは人間の感情のあり方が虚栄心だということです。もちろん虚栄心は関係性のなかであって自分一人でもてる感情ではないわけです。勤勉に労働することによって自分より上の階級と暮らしにはいあがっていきたい、自分より下のレーバリングプア (laboring poor) に落ちたくない、こうした虚栄心をもつことが原動力になって市場社会の社会秩序が形成されているのです。アダム・スミスの時代から現在にいたるまでの労働の現象のなかではせぬことだと思います。

「労働の意味は労働の外部（余暇）にある」。虚栄心に人間がとらわれているうちは労働の意義を積極的に評価することはできないという、アダム・スミスとは逆のことを今村さんは述べています。いまや労働時間が短くなって余暇が多くなっているのだから、そこに労働の喜びならぬ生きる喜びを見いだしていくべきであるということです。

そこで、文化人類学的な社会の例をあげています。その社会では一日三時間働いて、余暇には自分の労働の成果について品評会を全員で行っています。公共精神を大いに涵養するような言葉でいえば、天下国家を論じることに余暇を使うことで、虚栄心と利己心と自分勝手に流れていく最近の風潮に歯止めをさすべきだという、よくある典型的な結論になっています。

【参考文献】

堂目卓生『アダム・スミス—「道徳感情論」と「国富論」の世界』（中公新書）

大庭健『いま、働くということ』（ちくま新書）

今村仁司『近代の労働観』（岩波新書）